

Rotary 鈴鹿西ロータリークラブ会報

所属： 国際ロータリー第 2630 地区 鈴鹿・亀山グループ；

創立： 1985 年 3 月 27 日； RI 認証： 1985 年 6 月 3 日(No. 1665)；

事務所： 〒513-0802 三重県鈴鹿市飯野寺家町 816 鈴鹿商工会議所 3F；

電話： 059-383-7077； FAX： 059-383-0501；

E-Mail： info@rotary-suzuka-west.org； <https://www.rotary-suzuka-west.org/>

例会場： 鈴鹿商工会議所 別館 1 F 会議室； 例会日： 火曜日； 例会食事： 12: 00； 例会： 12: 30-13: 30；



持続可能なインパクトを生み出そう

2026 年 8 月 25 日(火)第 1839 回例会

例会場： 鈴鹿商工会議所別館 1 F 会議室

開始： 12: 30 終了： 13: 30

例会進行： 森 喜代造 副 S A A

点鐘： 会長 柴田友美

ソング： 四つのテスト

ソングリーダー： 服部高宣 ソングリーダー



会長挨拶

柴田友美 会長



今日は即席ラーメンの記念日で、1958（昭和 33）年、日清食品が世界初の即席ラーメン「チキンラーメン」を発売した日に合わせ制定されたようです。また、1931 年（昭和 6 年）のこの日、羽田に「東京飛行場」（現：東京国際空港）が開港した日でもあります。国内初の民間航空機専

用空港で、日本最大かつ東京・首都圏を代表する空港です。1952 年（昭和 27 年）に「東京国際空港」と改称され、1956 年（昭和 31 年）に航空整備法によって国内第一号の国際航空拠点に指定され、現在では通称「羽田空港」と呼ばれていることはご存じの通りです。

さて、地区より 8 月 17 日付で職業奉仕情報が地区 HP にて紹介されていますのでご確認ください。

今年度より電子化された 8 月号のガバナー月信の目次は以下の通りとなっていますので併せてご確認ください。

- ・ 会員増強・新クラブ結成推進月間
- ・ 地区委員長就任挨拶
- ・ 活動事業報告
- ・ 第 2630 地区 財団寄付状況
- ・ 第 2630 地区 マイロータリーへの登録状況
- ・ 第 2630 地区 ロータリーカード登録状況・・・個人的にはクラブでの作成も検討したい（但し、管理体制検証要）
- ・ 第 2630 地区 会員数報告
- ・ 第 2630 地区 会員動静報告が記載されています。

今日は理事会開催日です。例会の時間内で会員皆様には、ご意見も聞かせていただきたいと思います

考えています。

よって、会長挨拶ここまでとさせていただきます。
本日もしよろしくお願ひいたします。

幹事報告

柴田友美 前幹事

1. 鈴鹿ロータリークラブ様より9月9日
(水) 鈴鹿・亀山グループ合同例会・I M
「懇親会」への出席を変更される場合は、9月2日(水)午前中までにお願ひしたいとの連絡がございました。
2. 本日例会終了後、第4回理事・役員会を事務局において開催いたします。

出席報告

沖 俊成 出席委員長

正会員 19 名中 9 名出席 出席率 60.00%

ニコニコボックス報告

服部高宣 親睦・家族委員



敬称略・順不同

柴田友美:毎日本当に暑いです。1980年8月25日に長女を出産。この夏は冷夏で昼間でも25～26℃でした。

野間芳実:奨学金に少々。

伊藤義一:先週、久しぶりに東京・横浜方面へ行きました。向こうは比較的涼しかったです。鈴鹿は暑い!!

藤野恵子:森会員、卓話よろしくお願ひします。
楽しみにしていましたが、所用で早退します。
拝聴できず残念です。

沖 俊成:植木も野菜も傷みます。雨がほしいで

す。

本日のプログラム

会員卓話「ウミガメの生態について」

森 喜代造 会員



さて、今日はこのウミガメについてのお話をさせていただきます。先般、公民館でウミガメの講習会がありましたので、そのまま聞いたお話を報告させていただきます。

ご承知のように、カメというのは爬虫類でございまして、肺呼吸をしております、冷血動物と言ってワニとかヘビ、とかげの仲間でございます。

日本に生息するウミガメは、六種類おります。特に、赤ウミガメ、青ウミガメ、タイマイなど三種類が日本で一番多く生息しております。

ウミガメの重さは成人で200キログラム、大きさは1.5mから2m、寿命は長生きするカメで100年以上であると記録に残っております。

またアオ海ガメは、ほとんど一生を海の中で暮らしております。メスは3年から4年に一回陸に上がって砂浜で一度に100個ぐらいの卵を産み、また海の中に戻っていきます。雄は決して陸には上がってきません。

回遊の時は、海藻近くの海の中で過ごしております。

またアオ海ガメの食べ物でございしますが、赤ちゃんは肉食でございまして。小えびやクラゲ、小魚の赤ちゃんなどを食べます。大人になります

と、草食になって海藻を食べております。

雌は夕暮れを待って陸に上がり砂浜に直径40cm ぐらいの穴を掘って、中に百個ぐらいの卵を産みます。そして砂を掛けて穴を塞ぐと海に戻って行きます。

卵は約八週間でかえります。赤ちゃんカメはたったの 25g、甲羅はまだ柔らかく砂の穴から出て、急いで海に向かいます。

海の中にたどり着く前に海鳥や蟹に食べられてしまう赤ちゃんも多いそうでございます。また、海に入っても大きな魚に食べられてしまう、だから小がめは2, 3年隠れていなければなりません。

海に入るとどんどん沖の方へ泳いでいき、向かう波の向きで正しい方向を知るらしいです。また、ウミガメの暮らしについては、水面に浮かび上がって息をしますが、息を止めたまま1時間も水に潜っていられます。

昼間はサンゴ礁の周りを泳いでおり、夜になるとサンゴの間で眠ったりします。繁殖期になると回遊をするために集まり、自分が生まれた場所で卵を産み、海へ戻ります。

その場所にたどりつくのに何千キロも旅することもあります。日本の海岸から遠くはメキシコ湾までたどり着きます。

大人になればもう大丈夫でございます。それは硬い甲羅を持っているからでございます。

ところが、アオウミがめは絶滅しそうでございます。海の汚れや砂浜を散歩する人間やウミガメ取りの漁師たちのせいで、青ウミガメは絶滅しそうなんです。また青ウミガメの肉は不幸なことに、とてもおいしいそうです。そしてアオウミガメは調理すると、緑色のスープになるん

です。だから青ウミガメはこういう名前から来ているそうです。また人間は卵をとって食べております。青ウミガメは今ではとても数が減ってきております。

青ウミガメを守るために、ウミガメの養殖場が作られております。そこでは何千匹もの赤ちゃんガメが生まれ、海に離されております。また、ウミガメのすみかは地球を取り巻く広大な海洋でございます。そのため他のカメ類と比べると体の形状や整体も大きく異なっています。しかも砂浜で生まれて海に入ってしまうと、産卵の時に上陸するメスを除けば、陸に上がることはまずありません。雌ガメだけであります。

しかし近年はDNAの分析と最新の技術を用いた研究が進んだことで、新しい事実がわかってきました。日本周辺の海域には6種類の海亀が回遊していますが、このうち産卵のために上陸するのは赤うみがめ青ウミガメ、タイマイの三種類でございます。

本州や四国九州の主に太平洋に面した海岸と、南西諸島の砂浜に赤ウミガメの重要な産卵場所があります。屋久島の南西諸島ではアオウミ亀の産卵も見られます。また、タイマイの産卵はごくわずかですが、沖縄本島の南西諸島で見ることができます。日本各地で産卵するウミガメも普段はどこか別の海域で泳いでおります。産卵のために上陸してきた赤ウミガメの雌に標識をつけて、その後の回遊を調べた結果、冬の間は東シナ海で過ごしていることがわかってきました。この海域は冬でも海水温が高く餌となる海洋生物も多いので過ごしやすいと思われます。

青ウミガメの主な餌は、まき貝等の軟体動物、カニやエビの甲殻類といった海底に生息する動

物でございます。

ウミガメは魚のようなエラを持っていないので、他のカメ類と同じように肺で呼吸しなければなりません。そこでこの肺が魚の浮き袋の役目を果たしています。水面に顔を出す時に吸い込んだ空気を肺に溜めてウミガメは、水深 200 メーター以上も潜ることができます。ウミガメの場合、2 時間以上の潜水も可能だと言われています。またウミガメの交尾は産卵期が近くなると、産卵場の近海で行われると言われています。交尾を終えたウミガメのメスは、砂浜に上陸して産卵します。日本における赤ウミガメの産卵場は南西諸島から本州の太平洋岸まで広範囲に渡っております。

赤ウミガメの産卵は、沖縄で 4 月上旬、本州でも 5 月下旬には始まり、8 月まで続きます。ワンシーズンに一回から六回と、11 日から 25 日間の間隔を空けて行われ、一度だけということはないようです。青ウミガメの産卵期は 5 月から 8 月と赤ウミガメよりも少し遅く、またタイマイの産卵期は 6 月から 9 月でございます。ウミガメの産卵はほとんど夜間に行われます。上陸したウミガメは四本の足をうまく使って砂浜を歩き回り、巣穴を掘る場所を探すのです。場所を決めるとまず体が収まる程度の穴を掘り、次に後足を使って卵を産み落とす穴を掘ります。そしてピンポン玉のような弾力性のある卵を一度に 100 から 150 個ぐらい、時間をかけて生むのです。産み終わると海亀は涙を流しますが、これは眼の横にある涙腺から噴水の粘液を出して体内の塩分濃度を調整しているのです。

一度産卵した個体は、同じ海岸で産卵する傾向が強いと考えられています。

日本各地で行われている標識調査の結果、同じ海岸で何度も産卵している個体が確認されているのです。生まれた砂浜に戻ってくるのではないかという説もありますが、これはまだ完全に証明されていません。

また鈴鹿市の近辺では鼓ヶ浦の海岸で 6 月から 7 月にかけて産卵にやってきます。鈴鹿市のウミガメ保存会にお世話になっております。

子ガメの誕生は砂浜の中で温められた卵が 50 日から 70 日程度で孵化します。この期間は、砂浜の温度により変わっていきます。発育可能な温度は約 24 度から 33 度とされていて、負荷率もこの温度により変わってきます。親ガメが卵を抱く必要がないのが、砂浜の温度が適温であるため、産んだ後はすぐに海に戻ります。また卵はいくらかの水分を必要とするので、乾燥した砂の中では孵化できません。逆に大雨などによって水をかぶってしまうと、呼吸ができなくなってしまいます。また野犬や狸、イタチなどが卵を食べてしまうこともあります。

子ガメは孵化すると数日かけて地表近くまで上がってきます。砂の温度が低下したことを感じて夜を知り、地上に出てくるのです。出てきた小がめは、光の刺激により一斉に海に向かいます。小ガメには明るい方向に向かう習性があるので、山側よりも明るい海の方へ迷わず歩いて行けるのです。しかし街の灯りが明るかったり、近くに街路灯があったりすると、子亀は間違えて海にたどりつけません。

実際生きて海にたどり着くのは 100 匹の内 10 匹ぐらいしか戻れません。それは砂浜で砂ガニやカラスに食べられてしまうことがあるからです。

海に出た小ガメは、その直後の数時間、前足を懸命に動かして泳ぎます。夜のうちに敵の少ない沖まで出て行くのです。そして広大な海に散らばっていきます。

ですが、小ガメのうちは、かもめやサメなどの餌になってしまうことも多いようです。その後の小ガメはどこで生活しているのかは、長い間、大きな謎でした。大西洋で流れ藻に混じって生息していた赤ウミガメの小ガメが発見されたこともあり、流れ藻に乗って漂流生活を送っているのではないかとも言われていました。

最近分かってきたのは、日本の海岸などで生まれた北太平洋の赤ウミガメの小ガメがメキシコ沿岸で生息しております。

赤ウミガメの小ガメは未成熟個体の集団でこの海域で餌を取っており、大きく成長してまた日本へ戻って来ると考えられます。以上で私が講習を受けたウミガメの話でございます。

会長点鐘



会報発行担当：岩崎 透